

「3.11巨大災害」と市民の生活意識変化に関する考察（第2報）

—自由記入欄の記述内容に見る市民意識の特性—

岸 本 幸 臣

前報において、所謂「3.11巨大災害」によって、我が国の市民層が大地震・大津波・原発事故に対し、どのような防災意識を持ち、また今後の生活や社会のあり方に密接に関わる科学技術と社会制度の発展に、いかに向き合おうと自覚しているのかを意識特性として把握することを試みた。大地震・大津波は予測困難な自然災害との認識が強いものの、原発事故については人為的災害として、危機管理の甘さへの恐れと批判が強かった。また、社会・生活観では「3.11巨大災害」の教訓として、技術革新・経済成長・競争原理等の成長至上主義を支えてきた価値観が、一つの転換期にさしかかっていることを示す結果となった。この第2報では、調査票に設けた「自由記入欄」への記述回答が非常に多かったことから、その多様な内容を類型化し調査票に予め想定した質問群とは別に市民は何を訴えたかったのかを把握し、そこから「3.11巨大災害」が一般市民に与えた影響力の深さと広がり进行を考察することとした。結果として、巨大災害が原発事故を招いたことが、これまでの家庭生活や社会のあり方を再考する大きな転機になったこと、また自由記入欄への記述動機として、今後の生活への不安・恐れの受け止め方の違いが大きく影響していること等が把握できた。

乳幼児・学童の食物アレルギーのリスク評価と防御

岡 井 康 二・岡 井（東）紀代香

我が国では、国民の2人に1人が、なんらかのアレルギー疾患にかかっており、現在では、アレルギーは、国民病のひとつといわれている。とりわけ子どもたちの食物アレルギーの問題は、家庭においても、保育所・幼稚園・学校などにおいても、きわめて困難な緊急の課題となっている。そこで子どもたちの食物アレルギーについて、その症状の特徴と原因・しくみ、さらにその診断やリスク評価、そしてその対策・防御法などについて、現在までの知見をまとめ、最新の研究成果も含めて今後の課題と展望を具体的に議論する。

フィリピンにおける子どもの教育とケアに関する一考察

—ケアギバー養成教育と子どものケア人材としての活用—

渋谷 光 美

フィリピンにおいて、子どもの教育とケアが実践されている国立児童養護施設と公立デイケアセンター（保育所）の実情を把握した。デイケアセンターの複数担当制等による教育とケアの質的向上を目指す上で、子どものケア人材としてケアギバーが寄与できるのではないかと考えた。ケアギバー養成教育は、子どもへのケアサポートのカリキュラムを有しているからである。その点について、ケアギバー養成学校の教員にアンケート調査を実施した。ケアギバーは、子どものケアについて、発達段階をふまえたケアと教育方法に関する基礎的な知識とスキル、態度を修得しており、子どもケア人材としての活用は、ケアギバー養成教育の質的向上にもプラスの影響をもたらすのではないかと考えられた。

排尿ケアを中心とした、医療的ケアの歴史

松 田 久 雄

医療的ケアという言葉は、様々な現場で使われるようになっているが、統一的な見解はない。そして何が医療行為なのか、何が違法なのかという境界が不明瞭なため混乱が生じている。特に泌尿器科領域における排尿ケアに関する歴史的考察をしたものはないのが現状である。地域医療の流れに社会が向いている中で、排尿ケアを生活支援行為としてどのように位置付けるかが大きな課題となる。また今後高齢者の排尿管理も含めた医療的ケアの実施が非医療職にも広がったとき、それを担える力とシステムが地域にあるのかも疑問である。このことを踏まえた上で“療養上の世話”として現場で施行される時、それが上手く機能するか否かの観点から考察した。